

東アジア地域におけるサッカーの交流とナショナリズムの探求

キム ヒョンソン

金 賢善

(京都大学高等教育研究開発推進機構 非常勤講師)

2010年2月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

東アジア地域におけるサッカーの交流とナショナリズムの探求

キムヒョンソン

本稿の着眼点

今回の研究調査では、2010年、FIFA南アフリカ共和国のワールドカップアジア予選で北朝鮮と試合するようになった韓国のメディアの動向を調べてみる。こうした調査で現在の韓国社会における韓国という国家への帰属意識、またこの国家への所属とは別項目として韓国—北朝鮮の間に存在する民族意識のあり方を考察することができるだろう^①。そして韓国と北朝鮮という分断国家という特殊性が、サッカーのワールドカップという普遍的なイベントの場で、どのように取り扱われていたのかを検討する。さらに、それに加え、韓国より先に、2006年 FIFA ドイツワールドカップアジア最終予選で日本と同じ組みとなった北朝鮮の例を挙げてみたいと思う。ワールドカップの本選の進出のため、対戦しなければならない相手であった北朝鮮が当時、日本にとってどのように映り、語れたのか、それがどのような他者性に繋がるのか。北朝鮮を巡る韓国、日本の観点を比較し、東アジア地域における葛藤や理解の軸を検討する。

1. 2006年、ドイツワールドカップアジア最終予選、日本と北朝鮮

1) 2005年2月9日、日本の埼玉での試合をめぐるメディア表象

ここで、時間的では先であった、2005年、2006 FIFA World Cup アジア最終予選で日本と同じ組みとなった北朝鮮の例を挙げてみる。韓国と日本はどのような論点を共有して、異なる理解を持っているのか。

2005年の時点で、北朝鮮はおおむね、日本で敵視されている国であり、国交正常化には至らず、時には極端な発言の対象となってきたのも事実である。日本のメディアでは、韓国側がみられるような国家帰属や民族などで北朝鮮を見ることなく、サッカーそのものだけに限って北朝鮮を語ろうとしていたが、それで少ない情報に困っていると語りながら、北朝鮮を向かう日本の難しさや北朝鮮の不気味さが語られていたのが特徴と言える。それがどのように具体的に語られイメージされていくのかを調べてみたい。

2004年、FIFAドイツワールドカップアジア地域の最終予選の組み合わせの決定後、‘ジーコ監督も「情報量が少ない」と警戒する’様子を伝えている2004年12月7日朝日新聞では、‘知られざる北朝鮮代表/W杯予選で日本と対戦も/資金難 FIFA が援助/理論派監督 在日組みを抜擢/荒れた芝パスがつなぐ速攻が苦手’などの見出しで北朝鮮チームが語られた。そうした見方は2004年12月10日朝日新聞でも続き、‘サッカーW杯アジア最終予選組み合わせ/日本、イラン、ベレーン、北朝鮮/情報戦と体調管理カギ’として述べられている。特に北朝鮮に関しては、‘一方、最近、国際舞台への登場が少なかった北朝鮮に関しても、すでに1次予選2試合のビデオを

入手。田嶋技術委員長は、「どんな選手がいるかはわかっている」と、ベールに包まれた印象は持っていない。」と伝えている。

同紙は2005年2月8日では‘W杯アジア最終予選 明日対戦/北朝鮮をビデオ分析/速攻・集中力 要注意/読みやすさも/勝利に執着心’という見出しを使って、日朝戦に臨む日本側を伝えている。特に北朝鮮の勝利への執着を‘北朝鮮は1次予選11点のうち、後半に9得点。プレーに意外性はなくとも、集中力と勝利への執着心をみなぎらせ、終盤に勝ち点を奪ってきた。それに根負けしない精神面のタフさ大事になる。’と分析していた。

一連の記事でみると北朝鮮は未知、不慣れ、それによる脅威感に繋ぐ表現で述べられていた。その中でも勝利への執念が強調されていた。こうした閉鎖性を語る見方は、北朝鮮の練習試合の様子を報じる記事でもまた確認できる。

「初練習 10分公開 北朝鮮代表」

2005年2月8日朝日新聞

北朝鮮代表が7日夜、国立競技場で初練習した。報道陣への公開は10分間だけ。軽くビッチを走ったり、リフティングをしたりなど、和やかなムードで体をほくしたところで、非公開となった。

閉鎖された北朝鮮というイメージは練習の非公開という状況を持ってより具体的に表すことになる。2005年2月8日同紙は‘W杯アジア最終予選あすスタート/初戦「未知」との対決/日本 結束力で国内組重視/北朝鮮 人民軍傘下の選手中心’として伝えている。ここでは日本チームと北朝鮮のチームの組織が対比されて、未知の上、人民軍という、軍事的な色まで付けられる。

新聞のメディアに加えてテレビメディアも2005年2月9日対北朝鮮戦の直前、北朝鮮でのサッカー試合が生中継されないこと、彼らの競技場は人工芝で、“慣れないこの人工芝が日本の選手を苦しめることになるかも知れない(2005年2月7日 TBS News23)”こと、さらにメディアは、当日の彼らの練習は非公開であることを伝えてきた。このように、北朝鮮という国の不気味さ、不器用さ、閉鎖性が強調される一方、“我ら自身が勝手に不気味なイメージ”を作っているのであって、“彼らは普通の選手である”とする日本側の寛容も示している。しかし、それと共に、“現代っ子の選手もいる”、“謎も多い”などといった日本を判断の中心とする発言が多くみられた。だがそのうえ、“実力では日本が上”で“力は接近していない”とも言われる(2005年2月7日 TBS News23)。

このなかで、日本社会の中での他者の再発見もなされた。2005年2月8日テレビ朝日の報道ステーションでは北朝鮮の代表チームの一員である在日の安英學、李漢宰選手とともに、彼らに声援を送る応援団の存在に“日本を一色で語っていますが、一つの色ではない、多くの在日の人々が暮らしていることですね。”という発言がなされた。そこではかつての祖国として在日の存在が思い出されながら、北朝鮮を応援する他者として浮かび上がっている。

2005年2月9日朝日新聞(夕刊)でも‘輝くぞ在日の代表/Jリーグ広島李漢宰選手/家族ら活躍祈る’と在日の選手を上げている。そのなか、‘父の李康烈さん(57)は「在日の代表として、1人のサッカー選手として、素晴らしいプレーを見せて欲しい。’など家族の発言も伝えている。こうした形の、日本メディアにおける、「他人/自分の使い分け」としての「語りわけ」の特徴が指摘できる。こ

れは、「在日」に代表される「他者」を語る際のお決まりパターンでもある。そこでは、「他者」は一方では日本社会・文化とは異なる存在として排除されながら(日本による他者化)、他方では日本に都合のよいかたちで取り込まれる(日本による自己化)。こうした他者化が/自己化の使い分けが自在にできるからこそ、キムチやチヂミといったエスニック料理が人気を博しながらも、「在日」の地方参政権をめぐる議論では、排外主義・民族差別主義的な発言が飽くことなく繰り返される^②」と言われる。日本の社会での在日の存在は、こうした、自・他の曖昧な線の上に置かれ、自己・他者の境界の遊動的である。

次の文書は、2005年2月9日の2005年ドイツワールドカップアジア最終予選、日本と北朝鮮の試合を直前にした、朝日新聞の社説である。ここでは、自己・他者の境界の遊動性に置かれている在日選手に対する発言など、幾つかの論点を想定している。

「熱く、だがクールに」

2005年2月8日 朝日新聞

...日本と北朝鮮のサポーター席の間には、緩動席が設けられることになった。報道陣にも北朝鮮チームへの密着取材の自粛を要請するなど神経を配り、前代未門の態度で臨む。

日朝関係は、これ以上悪くなりようのないほどに、とげとげしい。

拉致問題での北朝鮮の不誠実な態度に多くの日本人は憤っている。そのうえ、核やミサイルの開発もやめない。

それに対して北朝鮮は、拉致は解決済みなど繰り返し、日本は過去の植民地支配の清算をしていないとして「わが人民の百年の宿敵だ」と非難し続ける。

互いの国民感情がこじれきったさなかの日朝戦である。

...植民地支配の記憶が新しい1954年、韓国の李承晩大統領はW杯予選のため日本に向かう選手たちを「負けたら玄海灘に身投げしろ」と督励した。W杯の日韓共催を成功させた今日では考えにくいことだが、サッカーとナショナリズムの結びつきを雄弁に物語る逸話だ。

しかし、スポーツには別の側面もある。決まったルールの下で、体力、技術、精神力を駆使して競いあふ。素晴らしいプレーに拍手を送り、互いの健闘をたたえ合う。どこのチームが相手だろうと、これを忘れては本当のスポーツとは言えないだろう。

...北朝鮮チームには、日本で生まれて育ったJリーガー2人が加わっている。「チームの仲間と気持ちは一緒だけど、一方で所属する日本のクラブで応援してくれる人のためにも頑張りたい」と抱負を語る。そんな彼らの活躍もみたい。

緊迫した試合となれば、日朝を問わずフェアでないと見えるプレーも出るだろう。それもサッカーだ。観客は遠慮なくブーイングし合ったらいい。「それが自然」と、協会の川淵三朗会長も言う。

...W杯への連続出場ができるかどうか。代表チームの成長を証明する正念場でもある。

まずは、決して侮れない北朝鮮だ。熱く、そしてクールに楽しもう。

この社説では幾つかの論点が想定している。纏めてみると次のようである。①日本と北朝鮮の国家間の葛藤 ②日本と北朝鮮に加え、韓国と日本の葛藤(過去)③スポーツと政治は別であり

ながら、サッカーとナショナリズムの密接な関係④北朝鮮と日本の間での在日選手⑤適当なナショナリズムの競争はサッカー試合の一部である。

これは、日朝戦をめぐる日本の大体のメディアの動きでもあろう。スポーツと政治は別の物だが、サッカーとナショナリズムの結びは当然の現実であるという認識が著しい。ところで、2005年1月14日北朝鮮は試合場での両国の国旗や国歌を控えることをFIFAに要請したこともある。サッカーの国際試合である敵視される国同士の試合の緊張を物語っているが、それは日本のメディアではただの北朝鮮の揺さぶりとみなされていた。‘場外戦’であって、日本サッカー協会がそれを断ることによって、完勝したと伝えていた^③。試合当日には日の丸は勿論、例の旭日旗が現れる。こうした応援の様子は次のように報じられていた。しかし、次の記事で伝わっている北朝鮮のサポーターは誰を言っているのだろうか。北朝鮮と国交正常化に至ってない日本に、北朝鮮の人々がサッカーの応援のため、来日しているわけではない。

「W杯アジア最終予選 壁越え燃えた」 2005年2月10日朝日新聞

両方に拍手、笑顔 コリアタウン 日朝サポーター競演

「スポーツと政治は別だ」。9日のサッカー・ワールドカップ(W杯)アジア最終予選戦。日本がロスタイムで下した北朝鮮とは厳しい関係が続く。しかし、予選突破の目標は同じだ。スタジアムで、テレビの前で、サポーターは緊迫したプレーに熱狂した。北朝鮮代表のJリーガーも生まれ育った日本を相手に戦い、両国のサポーターが接戦をたたえた。

...埼玉スタジアムでは試合開始1時間前の午後6時半から、日朝量サポーターの応援合戦が始まった。北朝鮮側が「イギョラ！」(勝て)と叫ぶと、会場の9割を埋めた日本のサポーターらから大きなブーイングが上がり、「ニッポン」を連呼して対抗した。

次は試合に関する分析をみていこう。朝日新聞は翌日の2005年2月10日“耐え抜いて光/大黒日本の救世主/ロスタイム勝ち越し弾/思わぬ苦闘/一体感で打破/欧州組み投入/ズム復活”などを見出しで試合を伝えている。サッカーなどを扱うスポーツ専門誌もこのように取り上げている。

「検証・北朝鮮戦 「自分たちの形」の陥穽」 2005年3月 Number622号

...北朝鮮がどの程度の実力なのかを、探りかねていたのでは。日本の動きは相手を分かっているという感じではなかった。試合前にビデオを何本も観ていたとしても、ボールに包まれている不気味さはあったでしょうから。

...本番と親善試合はやっぱり違うんです。カザフスタン戦とシリア戦はあくまでリハーサルだった。国歌を聴いて鳥肌が立つのは同じでも、立ち上がりが違うんでしょう。本番ではどうしても大事にプレーしようという気持ちが動いて、リハーサルとおりにいかなくなる。

...後半開始と共に北朝鮮が変貌したのは、尹正水監督がロッカールームで、「攻撃的に背戦え」と活をいれたからだけではないだろう。日本の慎重さが、彼らには臆病に映ったの

ではなかったか。自分たちがリスクを背負うことで相手に脅威を与えられるのは、残り 20 分の戦いで明らかである。

「勝っても悔しい」

2005 年 3 月 1 日 1014 号サッカーマガジン

...試合前に「北朝鮮は芝の環境が悪いからダイレクトパスが下手」なんて報道がありました。ふふ、どこがやねん！怒るで、ホンマ!加速するダイレクト感覚なら日本より上でしたよ、この試合。遠目から無理なシュートを再三打ちながら、ここぞという時はシュートフェイントで中澤祐一(横浜FM)の足を上げさせた。クロスからのダイビングヘッドは川口野能活(磐田)のファインセーブで事なきを得たが、ああいう駆け引きもちゃんとしていた。

正直、勝っても悔しい。北朝鮮のサッカーは、同点ゴールの場面でも芝の上でサッカーするに等しいから。美しい緑のキャンバスにパスで描いた幾何学的模様。日本のゴールは直接FKに、クロスと相手GKのアシスト付き。土の上でも強いのは日本。自慢にならない。

試合そのものはさまざまなメディアにより伝わっていた。新聞やサッカー雑誌などのメディアに加え放送メディアまで、サッカー試合そのものにしては北朝鮮への評価が人ごとに異なった。ある解説者は翌日の試合の後、北朝鮮の相手の同点ゴールを甚だしくキックミスであると、“このキックは明らかにキックミスです。狙っていません。もしこれを狙ってできる選手であれば、僕はもうヨーロッパに行っているとも思います(2005年2月9日TBS News23)”と断言した。多くのメディアにとって見たいのは北朝鮮の試合や実力そのものではない、試合の外の物をもって北朝鮮をみていたのではないだろうか。その試合そのものではない、北朝鮮を象徴するのが日本のメディアにとっては人工芝など具体的に表れたのである。

2)2005年6月8日、平壤での試合をめぐるメディア表象

2005年3月26日の日本のテヘランでのアウェー試合と、それに続く2005年3月30日平壤での北朝鮮対イランの試合。そこではテヘランと平壤という不穏なイメージや不気味な観衆について伝えられていた。北朝鮮対イランの試合は、途中までは汚くない試合をしていたと語られ、穏やかな試合運びは日本の中継では、不思議なものとして伝えられた(テレビ朝日)。当時、審判に猛抗議する北朝鮮の様相ですら、2試合連続の不利な審判判定に対する不満の表明として語られたが、それが翌日に一変する。翌日の3月31日のテレビ朝日の報道ステーションをはじめとする日本のメディアは無観客試合、第3国での試合の可能性を語り始めた。新聞メディアも同様に、‘平壤の騒動調査へ、FIFA日本戦の可不判断’などのように伝えた。

これは日本の議論から始まるものであり、‘小倉副会長が騒動を問題視、日本協会の小倉副会長は、北朝鮮のファンが審判の判定に怒り、イランの選手や審判団が会場に長く足止めされた事態について「ショック。同じことが日本戦でも起きたら困る」と問題視した(2005年3月31日朝日新聞)。(2005年4月1日の朝日新聞は、‘平壤で30日にあったW杯アジア最終予選、北朝鮮—イランの試合後、観客ら数千人が審判の判定に抗議して競技場を取り囲んだ問題について、日

本サッカー協会の小倉副会長(国際サッカー連盟=FIFA=理事)は 31 日、FIFAの規律委員会
で調査し、6 月 8 日の日本戦を平壤で通常通りに実施できるかを判断する見通しを示した’
と伝えた。同紙は北朝鮮のサポーターを次のようにも述べている。

「統制なし“反則”応援 北朝鮮 サポーター イラン戦 座席投込み、退席も」

2005 年 4 月 1 日 朝日新聞

サッカーの世界カップ(W 杯)アジア最終予選。北朝鮮代表は本拠、平壤で敗退し、苦しい
状況に追い込まれた。先日 30 日のイラン戦の後には、審判に不満を持つなどした観客数千人が
騒いで大混乱した。「苦難の行軍」、「堅忍不拔」、「忍耐心」。こんなスローガンがあふれる国にあ
った、金日成スタジアムで見た平壤サポーターの表情は、想像もできない、もうひとつの顔だっ
た。

0 対 2 に負けた 30 日夕方。記者はスタジアムのミックスゾーンで選手が引き揚げてくるのを待っ
ていた。すでに扉の外を数千人以上の群集が取り囲んでいた。

イラン選手がバスに乗り込もうと扉を開けた瞬間、群集がなだれ混み、選手は退避。記者がエス
カレーターを駆け上がって逃げる途中で、拳大の石が飛んできた。

...顔にペインティングをしたり、代表ユニホームを着たりはせず、グッズもない。ただ、敵がボ
ールを持つと「ウー」沸くのは国際標準。日韓共催の 02 年W杯が北朝鮮で放映され、ブーイングも
伝わったという。

「北朝鮮戦第 3 国で 日本側も想定外 開催国の選定が焦点に」

2005 年 4 月 30 日朝日新聞

...今後の焦点はどこが開催国になるかに移る。

FIFAが日本と北朝鮮の意向を踏まえながら開催国を選定する。日本協会はこれまで 02 年W
杯招致、98 年大会の第 3 代表決定戦など、FIFA、そしてアジア連盟と交渉をしてきた実績がある。
今後、どれだけ有利な条件を引き出せるか、日本協会の外交戦略が問われる。ただ、日本選手が
不慣れな人空芝の金日成スタジアムを回避できたのは、現時点でも好材料だ。

97 年秋、日本がイランとW杯フランス大会第 3 体表決定戦を戦ったときは、東西アジアで地理的
に中間となるマレーシアが選ばれた。悲観のW杯初出場をきめたそのイラン戦は、2 万人収容の
マレーシア・ジョホールバルのラーキン競技場の大半を青の日本代表サポーターが埋めた。今回
は、決着の瞬間を、空っぽのスタジアムで迎える可能性が出てきた。

この記事では、国際的に、交渉の実績を持つ日本サッカー協会が紹介されている。元々、予選
のホーム試合と遠征の試合の原則がなくなり、交渉の対象として語られ、国際舞台で有能な交渉
の実績の日本が浮び上がる。これに対して、北朝鮮の閉鎖性、不器用性、時代遅れなどの不穩
な他者性がよりはっきりしていた。

それに加え、もうひとつは人工芝であった。“人工芝でなければどこでもいい”と日本サッカー協

会、サッカー監督、元選手、解説者などの発言が、続けてメディアで伝えられた。‘人工芝^④’はあらゆる面で国際試合ができない北朝鮮を指していた。しかし、人工芝は北朝鮮の不器用さや不気味さを表す北朝鮮単独の象徴ではなく、FIFAが推進したサッカー改善策の一つでもあった。日本でも練習場は人工芝が用いられており、決して日本と無縁なものではない。しかし、日本は人工芝を象徴として北朝鮮に対する嫌悪の眼差しを正当化したのではないかといえる。サッカーに政治の話を持ち込まないと態度ではあったものの、サッカーそのものだけに限るメディアの目線は逆に、北朝鮮チームの状況の理解に必要な最小限の事実まで省略するまで至ってしまったのである。

2006年FIFAドイツワールドカップアジア最終予選で北朝鮮と対戦する日本のメディアは、北朝鮮を、サッカーの実力では日本の相手ではないが、他の点では、日本を困らせる国として表象してきた。サッカーのゲームでは、彼らの理解を超える行動、謎の多い人々、不気味で不器用な国といったイメージが伝えられることによって、日本人とは違うという差異の強調がおこなわれた。それによって、不愉快な嫌悪の眼差しで相手を語るようになる。しかし、不愉快な嫌悪の眼差しは、その被害者としての日本の立場から正当化できるのである。北朝鮮の脅威は、日本のナショナリズムを呼びだすものとされる。サッカー試合をナショナリズムの競演として見なし、相手に対するブーイングを督励したり、アジアの隣接国にしては、戦争の色が強い旭日旗が登場したりしていた。平壤、金一成スタジアム、人工芝など、閉鎖、不気味、脅威などを象徴していた。それにより北朝鮮という隣国に不安を感じ、戸惑う日本の像というのが日本のメディアの言説に存在していた。日本のメディアにおいては、北朝鮮という他者は理解を超える(理解の及ばない)存在として他者性を永続することになったのである。他者である限り、相手と自らの関わる歴史を捨象する、次では、その日本とは違うと、根本的な差異として脅威を与えていた。それでは、2010年ワールドカップのアジア3次予選で、北朝鮮を合っている韓国の場合を中心で考えてみる。日本とはどんな点を共有していて、何が異なっているのだろうか。そしてその違いはどんな状況の産物であるのかを、考察することに、意義があると思われる。

2. 2010年、南アフリカ共和国ワールドカップアジア予選、韓国と北朝鮮

韓国と北朝鮮の事例では2008年東アジア選手権大会、2010年南アフリカ共和国ワールドカップのアジア予選で、北朝鮮と韓国代表が対戦した2008年2月20日の重慶での試合、同年3月26日上海での試合と、同年6月22日ソウルでの試合に関する新聞メディア、スポーツメディアに関する記事を検討する。時系列に検討を行うため、報道メディアとスポーツメディアそれぞれの検討を交互に行うため煩雑になるが、検討では次の2つに考察の焦点を絞りたい。

まず1. 韓国新聞メディアにおいて韓国では圧倒的なシェアを占める大手のメディア(朝中東)(朝鮮日報、中央日報、東亜日報)とされる新聞と、この新聞らに対抗する出発点を持つメディア(ハンギョレ紙)との間の韓国と北朝鮮の試合、北朝鮮チームや選手の取り扱いにどのような相違があるか。韓国では、‘南北に分断されて以来、長い間反共主義が支配イデオロギーとして権力と一体化してきた。その間、言論機関は、権力の立場から情報を生産・収集・加工・配給し、思想を検閲することで民主主義の芽を封じ込めてきたのである。その見返りは、言論機関の独占的な

利益と言論従事者の高い社会的地位となってあらわれた。こうした韓国と権力の蜜月関係を、韓国では「言論癒着」と呼んでいる^⑤。韓国のメディアでは大手の日刊紙やこうした新聞を親会社としているスポーツ新聞を“チラシ”と呼ぶ、既存のスポーツ新聞や日刊紙に対する嫌悪感も大きく働いているのも事実である。こうした自ら権力になっている新聞に対する失望や反感で誕生したのが、ハンギョレのような新聞や、コラムで筆者と読者が意見を交わす形のインターネット新聞である。特に、既存メディアに対する反感を表すのがインターネットなのである。ある分析では、‘韓国では現在、民主化と改革の動きが急ピッチで進んでおり、インターネットという電子メディアが既存のメディア権力に対抗するなかで新しい政治的な公共空間として生成されている^⑥’という。そういう理由で、分断国家の韓国での支配イデオロギーの反共を主張するメディアとそれに対抗する形で成長してきたメディアの立場において、北朝鮮のチーム、選手がどのように映るのか。

また 2. 対立的な見方を持つ新聞を媒体とする報道と、スポーツを専門に記事を掲載するスポーツメディアとの間で、韓国と北朝鮮の試合、北朝鮮のチーム、選手に関するマスメディアの取り扱いについてどのような相違があるか。サッカーそのものをみると、チョンテセ選手はどのように述べられているのか。ゲームとしてサッカーはゲームの歴史で少なくない紛争、葛藤が存在する。サッカーの歴史をレファレンスとして持っているスポーツメディアは、韓国と北朝鮮の試合を語る際、どのように自分の立場を主張しているのか。

なお事例検討では、中国の重慶、上海、韓国のソウルで行われた計 3 回の試合記事ごとに区切りを設けて検討をしてゆきたい。さらに、2006 年のドイツワールドカップのアジア最終予選で北朝鮮と会った日本の場合と韓国の場合とはどんな論点を共有して、違いを持つのかを考えてみる。

1) 2008 年 2 月 20 日中国重慶での試合をめぐるメディア表象

中国重慶で行われた試合は、引き分けで終わったが、北朝鮮の FW であるチョンテセ(鄭大世)選手がゴールを決めたことが取り扱われた。報道メディアではハンギョレ紙、スポーツ紙では、スポルタルコリア、プレシアン・スポーツがチョンテセ選手について報じている。サッカーというゲームの特徴で、相手チームのゴールを取る選手はいつも注目の対象となるだろう。しかし、ここで、3 紙に共通するのは、重慶での試合でゴールを決めたチョンテセ選手の活躍について報じるのではなく、彼の実力に加え、彼の生い立ちについて述べられていることだ。韓国のメディアは他者である彼の他者性に注目するが、生い立ちとは、彼の他者性の性質であった。父が韓国籍ではあるが、日本の外国人登録証が韓国籍ではなく朝鮮籍であり、日本の J リーグでプレーしている一方、北朝鮮の代表となったことである。彼が日本の朝鮮学校で民族主義的教育を受け、祖国を北朝鮮だと感じていること、またできるにもかかわらず日本や韓国に国籍を変更せず、日本では朝鮮籍の選手として J リーグで活躍し、北朝鮮代表として韓国と相対していることの中、何を主に取り上げるかということになる。そして、それが韓国における民族と国家という帰属意識を露にすることに繋がる。こうした、在日でありながら、北朝鮮の代表となった選手を巡る民族と国家意識の交錯は、北朝鮮を相手にした日本のメディア言説ではみることが稀であったと言える。

以下で見るように、スポーツメディアであるスポルタルコリアはチョンテセ選手が優秀な得点能力

を持つ選手の不在で苦しむ韓国が欲しがらる選手であることを述べている。プレシアン・スポーツは彼の国籍について誤報をまじえながら、彼が北朝鮮と韓国の間立っている人物であることが、彼の選手としての商品価値を高めていることを指摘する。

「チョンテセのヨーロッパ的なゴール感覚。韓国まで破った」

2008年2月21日 スポルタルコリア

...チョンテセは20日中国重慶のオリンピックスタジアムセンターで開かれた第3回東アジア選手権2次戦韓国との試合で後半27分0-1に負けていた競技を幻想的なゴールによって引き分けまで持って行った。後方から長く超えてきたボールを取るため走り韓国の守備手と競り合うところで体の均衡が崩れるにも右足でシュートし繋げ入れたゴールはヨーロッパでも簡単に見られない素晴らしい場面であった。

既に日本戦で驚異的なドリブル突破に続くゴールで韓国と日本のメディアの大々的な注目を浴びたチョンテセは韓国戦でも再び驚くゴール感覚を見せた。アジア選手のゴール感覚ではないと思われるくらい得点場面でチョンテセが見せたプレーは優れていた。最近国内攻撃手のゴールの飢饉に苦しむ韓国の立場では羨ましいと感じられるくらいだった。

韓国、北朝鮮、中国の観衆が混ざったスタンドからはチョンテセがボールを取る度歓呼を送った。彼が今回の大会最高のスターであることを証明する応援の声であった。

「チョンテセと Wayne Rooney…共通点と象徴性」

2008年2月21日 プレシアン・スポーツ

...スポーツ界でスターとして長生きするには、実力だけでは足りない。‘象徴性‘をそろえるべきだ。チョンテセはまだも行く先が遠い選手である。確か、優れた才能を持っているが、よりもっと磨く’原石‘に近い。しかし、彼がスターとして浮上するに、一つの条件となる’象徴性‘一つは確実だ。彼の先代が韓国で出生して、彼の国籍も韓国であるが、北朝鮮の人共旗を胸につけてプレーする事実のお陰である^⑦。

Wayne Rooney 選手という海外の有名な選手に比べることでチョンテセ選手はサッカー選手としての能力を認められている。すなわち、北朝鮮の選手という他者性が、より、普遍的なサッカーのレトリックを使った装置により娯楽的に語られている。ハンギョレ紙は、チョンテセ選手を題材にしなから、韓国—北朝鮮という軸を俯瞰した時に現れる、国家間対立と南北の統一という2つの視点を、日本を媒介として導入し、朝鮮半島—日本という視軸を設けることで相対化しようとしている。少し長いですが、以下を見てみよう。この記事では、過去の日本による植民地支配を参照枠として、南北対立の統合という課題をあげている。

「チョンテセ、南—北—日本の境界で咲いたサッカーの『花』、韓国国籍の北のサッカー代表

『攻撃核』、映画『わが祖国』^⑧なしには、彼もいなかった。」

2008年2月21日ハンギョレ紙

…彼が韓国の国籍でありながらも北朝鮮の代表になったのには事情がある。彼は総連系朝鮮学校を16年通った。愛知朝鮮初級学校、東春朝鮮背初中級学校、愛知朝鮮中高級学校、東京朝鮮大学校、彼は16年『我が学校』で学んだのである。我が学校と呼ばれる朝鮮学校はただ通うだけの学校ではない。日本学校で囲まれた言語の島、民族の島である。…民族という言葉が持つ戸惑いの姓で、知識人達が常にその言葉を控えているが、移住、離散、差別、排除の植民地歴史でも植民地の本国に残った‘ザイニチ(在日)’には、生存が掛かれた自己同一性の保存の歴史である。

…彼の心の中の祖国は北朝鮮である。実際に、彼は去年、5月、北朝鮮の代表に選ばれたという知らせを聞いて『16年、朝鮮学校でサッカーをやってきたため、私にとって代表チームは共和国チーム』と明らかにしたことがある。

…しかし、朝鮮学校がなかったらチョンテセもない。彼は多分、韓国籍を簡単に諦め、日本の国籍を取得し日本の名前でJリーグで活躍できたかもしれない。繰り返しになるが、民族が重要だと言っているわけではない。重要なのは、民族を捨て、同和していくのが多勢である社会で、彼が知らぬただ流されず、日本—朝鮮という関係で民族という観点をとるのであればそれでいい。その次は、どうせ自分で進路を決めることだ。朝鮮学校で習った目は、日本人として生きて、彼の生涯を貫通する中心になるからである。

…チョンテセ選手をみると北海道の朝鮮学校を記録した映画(我が学校)が思い浮かんだ。サッカー部の学生達がマラソンをしながら練習する場面や、日本学校の学生らに負けて、涙を落とす場面が長く思い浮かんだ。

…南と北の国籍を超えて、同胞の社会を一つで結わえてきた丈夫な紐帯で求心点ある我が学校。入学する前には、独りぼっちで生きてきた同胞の子供達がやっど私達‘を悟る過程。まさにこの映画言おうとする主題だ。チョンテセにもその経験が今後、生きる日々で一番重要な元手と供給縁となるのであろう。

スポーツメディア、報道メディアのハンギョレ紙は共に、チョンテセ選手の重慶での活躍というよりも、彼が北朝鮮と韓国という国家間の境界を横断する人物であることに焦点を充てた記事となっている。ここで、ハンギョレ紙の見方は、北朝鮮と韓国という国家対立を、‘韓民族’という単位で乗り越えようとしている点だ。そしてそれを乗り越える象徴として在日で民族教育を受けたチョンテセ選手を取り上げていることである。

重慶の次に開催地である上海での試合は、北朝鮮が平壤での試合開催を拒否したため開催された。次の事例で見ると、こうした開催地をめぐる韓国と北朝鮮の対立は、報道メディアの中でも国家と民族をどう捉えるかについて差異を生み出している。

2)2008年3月26日中国上海での試合をめぐるメディア表象

上海での試合は、北朝鮮がホームでの試合を拒否したために行われた。以下で見るように、試合前から、こうした北朝鮮と韓国の葛藤を背景にしてチョンテセ選手の模様を伝えている記事が著しい。チョンテセ選手が北朝鮮、韓国という国家間対立、朝鮮半島と日本との歴史意識を乗り越えようとする姿を伝えながらも、彼を北朝鮮の人であることを「人民」という言葉で表象している。‘人民’は北朝鮮の社会主義の理念と結び付く言葉として思われ反共産主義が支配イデオロギーとして長く機能している韓国では、意味と関係なく使用を控えている言葉である。上述した通り、Wayne Rooney 選手という海外の有名な選手に比べることでチョンテセ選手はサッカー選手としての能力を認められ、‘人民’という言葉で、北朝鮮の選手という他者性も娯楽的に語られる事になるのである。あるいは、より鮮明な’北朝鮮’の選手としての他者性を色付けることにもなった。

「浦項で会った『人民 Rooney』チョンテセー韓国は幸福を植えてくるところ」

2009年3月18日 東亜日報スポーツ

…(チョンテセ選手は)『(韓国)は同じ民族で誇りを思い出させ、幸せを植えてくれる場所』だと言った。『統一』と『一民族』を強調するのはあいかわらずだったが韓国の代表チームの活躍をみて自分がワールドチームの出戦に貢献したという言葉で韓国に対する特別な認識と感情が感じられた。彼は『日本は私を育てたが、韓国は離そうとも離せない大事な存在』だと淡々に述べた。…『祖国のイメージが良くないのをよく知っている。』と前提したチョンテセは『北朝鮮の選手としてサッカーを通じて、南北と日本、3カ国を繋げる架け橋の役割をしたい』と東アジアでの自分の『役割論』を伝えた。

また、こうした観点で試合前の北朝鮮代表チームの様子を、北朝鮮チームが取材班や外国籍の人間に対して閉鎖的なチームであるという様子を伝えている。

『「スポーツ散策」北朝鮮のサッカー代表チームの二つの顔』

2008年3月28日 東亜日報

日本で育ってきた総連系チョンテセ(川崎フロンタレ)と安英學(水原三星)はキムジョンファン監督など他の北朝鮮選手団とは一変した様子だった。

…北朝鮮の団長であるソングワンホ朝鮮オリンピック委員会副委員長など一部有名人事はチョンテセと安英學の一举手一投足をチェックした。競技先日の訓練が終わって韓国の記者達が彼らにあうとソングワンホ団長は何を言うのか一つ一つチェックして記しまでした。競技が終わってからもミクストゾーンまでずっと後ろに付いた。

北朝鮮が直営する上海の平壤館の職員達は3年を周期として勤務地を変えるそう。現地人と親密になる前に変えるらしい。

10万人のホームファンの熱狂的な応援などホーム home advantage を諦めるまで、上海で競技を行った北朝鮮、彼らの閉じたところがいつごろ開くだろう、0対0で終わったスコアのように行き詰まる取材であった。

2005年の時点で、北朝鮮戦に臨む日本では北朝鮮の中の在日の選手に注目し、彼らの存在が、断絶の関係である北朝鮮と日本の中に置かれている、あるいは、自分の内側の他者であると見ていた。こうした、在日選手を北朝鮮の完全な閉鎖から外へ繋ぐ存在としてみる見方は韓国のメディアでも存在している。以上のような試合前の北朝鮮チームとチョンテセ選手の模様は、記者の見たものを伝えるところもあるが、韓国とは区別された北朝鮮の人としてチョンテセ選手を表出することにつながる。そして、平壤での試合が北朝鮮によって拒否され、結果上海で試合が開催されることになったという事情は、韓国と北朝鮮との間の民族という共通項と、国家の対立という対立項のどちらかを軸にするかにより、民族あるいは国家への帰属が鮮明に分かれる。ここでは、チョンテセ選手に関する直接の言及はないが、大手新聞メディアとハンギョレ紙の差異が際立って表に出る記事が存在する。東亜日報、中央日報などが北朝鮮と韓国という国家を軸にした対立を標榜し、韓国という国家への帰属を擁護するのに対し、ハンギョレ紙は南北の対立があることを述べつつ、国家対立を民族という共通項で克服しようとする立場に立つ。以下を見てみよう。

まず、次の報道をみてみよう。以下の太極旗とは大韓民国国旗である。

「太極旗を力強く… 愛国歌も思い切り歌え」「決して退けない」

2008年3月26日 東亜日報スポーツ

…もとは平壤で開かれる予定だった競技が上海に来たことが南北の自尊心の対決の始まりだった。北朝鮮が FIFA の規定した『太極旗掲揚と愛国歌提唱』を拒否して韓国の自尊心に傷つけ、FIFA の仲裁にも北朝鮮は第3国を選んだ。北朝鮮は『共和国創建以来、北朝鮮に一度も太極旗と愛国歌が許容されたことがない』という理由で金日成競技場の10万ホームの観衆まで諦めて上海に来た。太極旗と愛国歌で触発された自尊心対決の最終の終止符をつけるようになる。南北は勿論、全世界がこの日の競技に関心を集中する理由がここにある。

サッカーだから、国家対決を鮮明に表しているというのは、北朝鮮戦に臨む日本のメディアでも見付ける見方であった。日本のメディアでも①日本と北朝鮮の国家間の葛藤 ②日本と北朝鮮に加え、韓国と日本の葛藤(過去) ③スポーツと政治は別でありながら、サッカーとナショナリズムの密接な関係④北朝鮮と日本の間での在日選手 ⑤適当なナショナリズムの競争はサッカー試合の一部である論旨で北朝鮮との試合を語っていた。サッカーとナショナリズムの結びは当然で、相手へのブーイングも戦争を思い出す象徴も使えると見なされていた。日本と北朝鮮の間での過去、現在の葛藤を全て省略して、あるいは中立して、サッカーの中に閉じ込めたような見方は、こうした韓国-北朝鮮の試合を見る側にも通じている。ところで、これに対し、次のような報道を見つけることができる。

「南北上海で相対す…勝者も敗者もいなかった」

2008年3月27日ハンギョレ紙

ワールドカップ3次予選‘90分攻防0-0引き分け
海外派総動員でも北密集守備破れず

太極旗が掛かって、愛国歌が響いた。応援団は観衆席で大型の太極旗を二つ広げた。千個の小型の太極旗も揺れた。もとはここは平壤のはずだったが、北朝鮮はまさにその太極旗と愛国歌をついに許さなかった。2回の交渉で、両方は高声を交わすくらい意見差を縮めず、南北サッカーは他人の地上海で国旗を二つ上げ会うようになった。白い服を着揃えた北朝鮮の応援団600人が“朝鮮勝て”を叫ぶと、2万余りの韓国応援団が“必勝 KOREA”という歓声でその声を塗り替えた。まだ一つにならなかった南北は二つの国家が演奏されてから競技を始めた。

韓国側のメディアは国家への帰属を擁護するか、日本のメディアの論旨より2つに別れていると言う事ができるだろう。南北の対立を乗り越えるような民族という単位への帰属を擁護するかの2つの対立軸で上海での試合を伝えていた。この際、チョンテセ選手は一方のメディアからは北朝鮮が持つ閉鎖性というイメージを担う人物として表象された。中央日報、東亜日報が北朝鮮選手を韓国とは区別された別の国家に属する選手として描き、勝敗がつかなかったことを試合そのものが観客に対して魅力のないものだったとしている。他方ハンギョレ紙は試合が引き分けに終わったこと、チョンテセ選手が北朝鮮の選手であることを述べつつ、勝敗がつかなかったゲームであっても観衆はゲームを楽しんだとしている点で、保守メディアとは異なる視座をもっている。観客がゲームを楽しんだかどうかは、その場に居合わせた報道関係者の目でも判断の難しいところであろうが、ゲームの勝敗が付き、国家という名前を背負った対決に決着がついたかどうかに関して、相互対立する観点の価値判断が異なっている。こうした両面をみると、チョンテセ選手を語る韓国のメディア言説で、国家と民族という概念上の区別・葛藤が存在しているのが分かる。ここで、ナショナリズムに関する韓国側の見解として、国家主義と民族主義の相違を主張する意見を上げてみたい。

たとえば、ゴミョンソブ(고명섭)は彼の著書、『知識の発見(韓国知識人の問題談論読み)』^⑨で、韓国知識界の‘脱/反民族主義’を批判した。‘民族主義と国家主義を間違えたらいけない’西欧の概念で私たちの現実を解釈するディレンマ’をよく物語っている。ナショナリズムは民族としても、国民としても、国家としても翻訳される。したがって、ナショナリズムもある時は民族主義として、ある時は国民主義としても翻訳されるが、このように翻訳された言葉は‘お互いに同じ語源から出たとは見なされないほど意味の偏差が大きい’そして、民族主義と国家主義を区別することを提案する。たとえ同じ語源を持っているとはいえ、韓国の社会で植民地解放運動や民主化運動の動力となってきた民族主義を修辞学的には、民族主義を前面に出したが、実際には民族主義の勢力を圧殺してきた国家主義と間違えるといけない’とみなしている。チョンテセ選手をキーワードとして調べて確認できるような、違いは、こうしたナショナリズムの翻訳問題、あるいは概念的な定義の違い、国家主義的な解釈あるいは民族主義的解釈の違いとしても理解できるのではないかと考える。

3)2008年6月22日ソウルでの試合をめぐるメディア表象

では、ソウルで開催された次の試合では、チョンテセ選手はどのようなイメージのもとで表象されたのだろうか。2008年6月22日に開催された北朝鮮と韓国との試合についての報道では、保守メディアは引き分けに終わったゲームを報じつつ、中央日報のようにチョンテセ選手については誰よりも北朝鮮選手らしい精神力を持つ選手であると報じ、東亜日報は北朝鮮らしい選手であるとは報じてはいないが、韓国のテレビに出たいというチョンテセ選手のコメントを伝えている。こうした東亜日報の報じ方は南北を比較して、資本主義の南(韓国)の豊かさと対比される北朝鮮というイメージを彼に背負わせていることを指摘しておきたい。日本で生まれ現在まで暮らしている事実は省略され、単なる、南の豊かな生活に憧れているように描かれている。資本主義の豊かさとは無縁で、精神的な強さを求めている北朝鮮選手として彼が描かれている様子を、以下で、中央日報、東亜日報の記事を見てみよう。

「サッカー競技、もっと強い精神力武装」

2008年6月20日中央日報スポーツ

…南北戦に挑む覚悟も人と違う。日本で育ってきたが誰よりも北朝鮮の選手らしい。彼は18日朝鮮総連(在日朝鮮人総連合会)機関紙である朝鮮新報とのインタビューで「南北の試合はいつも特別な意味を持つ。朝鮮のサッカーの現実には韓国より劣悪だ。だからこそより強い精神力で競技に挑みたい」と言った。空港に着いて「頑張ります。ゴールを入れます」と短く感想を述べた。

「チョンテセ『ロッテワールド行けず残念』」

「韓国TV 沢山出たい。…Kリーグ条件みて進出」

2008年6月23日東亜日報スポーツ

チョンテセは韓国戦が終わった後、こっけいな表情で「韓国TVに沢山出たい。」と言った。その理由を聞くとチョンテセはわざと「同じ民族だから私は韓国と切れない縁がある。そして私の存在を沢山知らせたい」と加えた。

チョンテセは「こんな熱烈な応援は初めてだ。本当の感動的だった。」と競技場を埋めたファンに対する感謝も忘れなかった。そしてチョンテセは「韓国TVも見ることができなく、ロッテワールドも行けなくてもいい。」と再び天真爛漫に微笑んだ。

期待の南北対決、ゴールの祭りはなかった。」「両チームみな勝ちたい意志がないようです」

2008年6月23日東亜日報スポーツ

22日ソウルワールドカップで開かれた2010年南アフリカ共和国ワールドカップアジア地域3次予選最終競技韓国ー北朝鮮の試合を見守ったサッカー関係者達の反応は同じだった。

ここで、ハンギョレ紙はどういった報道をしていたのかを以下で見てみたい。

「ソウルで再び会った南北スポーツ...勝敗はなかった。」

2008年6月21日ハンギョレ紙

「二つの国歌響き...5万観衆『アリラン』応援」

3年前、まさにここで統一サッカーをした後、大型朝鮮半島の旗を上げた南北は再び2つに分かれて会った。FIFA 主管初めてのソウル試合。4.25、鴨緑江、平壤市、小白水所属の北朝鮮選手が紹介される時、観衆は拍手で迎えた。韓国の国籍父を持って、日本で育った北朝鮮の代表となったチョンテセ(川崎フロンターレ)の顔が電光板に浮ぶと、もっと大きな歓声で彼を歓迎した。チョンテセは韓国のプロの舞台を踏めばFCソウルのホームグラウンドであるこの競技場でプレーしたいと言った事がある。...北朝鮮国歌が先ず、韓国の国歌が続いた。2 国歌が響いた後、中央線を挟んで向かった南北選手らに『赤い悪魔チョンテセ』は南北がよく知っている『アリラン』応援曲を歌いながら競技ホイッスルを待った。ゴールの後側には6.15 共同宣言実践南側委員会とカンギョレ統一文化財団が募集した数白人の応援団が『私達は一つだ』という垂れ幕を掛け朝鮮半島旗を揺らした。警察は他の競技より2倍を超える1000人余りの人員を配置した。出入口の階段まで警察を座らせて待機したが、4万8519人の観衆は増えた警察が無力になるくらいただ競技を楽しんだ。

事例1)から3)という区分を設け、計3回あった試合についてのマスメディアの報道を検討してきた。ここで、考察として、異なる論点を持つ新聞メディアの両方、新聞メディアとスポーツメディアという分類を設けて考察してみた。

韓国の新聞メディアの間には、韓国と北朝鮮の試合、北朝鮮チームと選手をめぐる対立項が存在する。まず、南北の対立を擁護しつつ、対戦相手国としてのチョンテセ選手を表出するのに対し、南北対立があることに言及しつつ、南北の対立を民族という共通項で克服しようと試みが対立している。

新聞メディア内で存在する差異とは、韓国と北朝鮮の試合、北朝鮮チームと選手、特にチョンテセ選手を題材にして記事が書かれると、国家への帰属か、民族への帰属かという対立項になり、チョンテセ選手は国家と民族いずれかという対立項を集約する人物として注目を浴びることになる。しかし、こうした国家と民族をめぐる対立項は、いつも鮮明に対立しているわけではない。というのも、以下で見るように、重慶、上海、ソウルという、数カ月間で執り行われた国際試合がひとまず終了した直後の保守メディアの記事では、韓国と日本の間の獨島(竹島)をめぐる領土帰属問題について、チョンテセ選手の発言を取り上げ、彼の「獨島は韓国の領土である」という考えを援用し、獨島の韓国帰属を擁護する記事が書かれるからだ。

「チョンテセ『獨島は無条件韓国の領土』」

2008年7月17日東亜日報スポーツ

北朝鮮チームの主攻撃手であるチョンテセ(川崎フロンターレ)が最近、韓日の両国の 이슈となっている獨島の問題について『無条件我が地』という考えを示した。

チョンテセは16日CBSラジオ『キムヒョンジョンのニュースショー』で出演し、『カラオケでよく歌っている歌の一つが‘獨島 は我が地’という歌だ』としたあと、金剛山観光客被殺事件で南北関係が閉塞したことに関して『複雑な心境だ。力を合わせて欲しい』と言った。

もともと韓国、北朝鮮のどちらに帰属する国民であるかを強調することが多い保守メディアでは、「祖国」北朝鮮の韓国での「イメージ」が悪いことに目配りしつつ、南北統一を表に出すチョンテセ選手が表出されている。保守メディアでも南北いずれの国民であるかという視点と、南北とは国家という単位であり、国家の対立を民族で乗り越えようとする視点の2つが、チョンテセ選手を集約点として交錯した形で現れる。

国家への帰属か、民族という単位か、というメディアの動向は、日韓という植民地支配を背景にした国際関係が表に出ると、例えば、獨島(竹島)の領土をめぐる問題が国際試合の最中表面化した際には、北朝鮮選手であったチョンテセ選手は獨島の韓国への領有の正当性を語る存在になる。韓国－北朝鮮－日本という3つの軸に突き当たった時、チョンテセ選手が韓国という国家の存在を明確にする他者の北朝鮮選手である同時に、韓国への領土帰属を正当化する内側の存在となる。南北の国家間の対立と民族の統合という2つの立場の間で、メディアの必要により、彼の他者性の性質が要請される。彼の他者性は固定されたものではなく遊動的である。こうした彼の遊動的である他者性は、韓国のメディアの一部で境界に立っていると見られていた。次は彼、在日選手をみるもう一つの見方を上げたい。

3. 国家、民族そして Korean Derby、サッカーで見る境界

チョンテセ選手の遊動的である他者性は、韓国のメディアの一部で境界に立っていると見られていた。それは彼だけではなく、彼をはじめとする在日選手をみるもう一つの見方になっていた。

『取材手帳』11番目のコリアンダービー悲しい対決の終わりはいつだろうか。」

2008年3月26日スポルタルコリア

北朝鮮にも韓国にも定着していないチョンテセに『韓国はあなたにどんな意味をもつのか』という質問を出した時、言いよどむ彼の姿は昨今の現実を端的に見せる場面であった。

... 2008年3月26日には上海虹口スタジアムでは敵だが、いつかはひとつのユニホームを着るある日もくるのではないか。

『南北戦』上海の夜』濡らした朴智星とチョンテセの涙」

2008年03月27日スポルタルコリア

26日中国上海虹口スタジアムで開かれた2010南アフリカ共和国ワールドカップアジア3次予選戦。両チームみなゴール記録できず0-0引き分けで終わった競技で南北の随一のスター朴智星とチョンテセがみな涙を流した。理由は違うが2選手は上海の夜を涙で濡らした。...彼が涙を流したのは応えて(感激して)くる感情のためだった。競技が終わり、“祖国統一が近付いたような気がする”と言うくらい南北戦に大きい意味を与えたチョンテセは愛国歌に続き、北朝鮮の国歌が響き渡ると涙を流す。‘我が学校’と呼ばれる日本の朝鮮学校教育を受けて来たチョンテセには南北戦は胸が熱くなるものだった。

この試合について言えることは、『祭りに食べる物が無い』ということだった。

...一方、この日、競技場に『祖国統一』、『私達は一つ』など南北を応援する声が元気よく響いた。この日の真正な勝者は南と北を一緒に応援したサッカーファンだった。

「韓日アールスター戦、悩みが深まる理由 - サッカー専門家パクムンソン」

2008年03月27日フットボリズム(footballism)

今、この時点でチョンテセ選手に獨島に関する立場を問うのは、やりすぎでなないか。韓国と北朝鮮、日本の境界人として生きていたチョンテセ選手には過酷な質問であるかもしれない。一方では、自分の考えと信念を堂々表現する彼(チョンテセ)選手には1種の衝撃を受けた。自分が恥ずかしく思われるくらいだった。

これはチョンテセ選手が、国内ラジオのプログラムに出演し、‘獨島は我が領土’という発言をしたという記事についたコメントの一つである。祖父母が韓国出身で、自分は日本で生まれて育ったが代表チームは北朝鮮を選んだ‘境界人’の奇妙な運命を指す表現でもある。真実の前で、迷いのないチョンテセの姿で沢山の悩みと思いが寄ってくる。チョンテセが獨島関連発言で日本で困った立場に置かれたという話に接すると心配だ。

重慶、上海、ソウルと続いた試合が終わった後に彼をより個人的にみようとしたことである。獨島をめぐる問題が保守メディアで取り上げられた際、獨島の帰属問題をめぐる立場決定をチョンテセ選手に迫ったことに対する批判の見方もあった。上で上げてみた一連の記事の特色はチョンテセ選手をめぐる韓国のメディアの動向そのものから距離を取り、別の観点で批評しようとしていることだ。選手という商品を映し出すメディアの視線そのものがあまりにも典型的なであり、国家と民族という歴史を一個人である選手に集約させていく観点の過剰さを指摘している。

『ソヒョンウクの beautiful game』『在日』チョンテセ・獨島 と秋成勳の間 サッカー専門家ソヒョンウク」

2008年7月25日スポルタルコリア

韓国人(ザイニチ)の背景を持っているスポーツスターらに、今は、韓国の大衆(もしくはメディア)が取る態度は極常套的であった。我が先祖の血縁を持って生まれたが日本で育つし

かななかった彼らにメディアは当然‘悲劇的な’過去や正体性の困難‘という主題を押し付け、そうして彼らはみずから沢山の努力を掛けた長い時間とは違う名前で我らの前に立った。メディアのこうした接近の方式は千篇一律的であるが理解できなくもない。

…しかし、日本で生まれて韓国国籍の父親の下で育って北朝鮮のチームの選手となった履歴はチョンテセが本人の意思とは違って韓国でだけでは、‘血縁’と‘理念’のレンズを通った眼差しに露出されるしかない条件となる。

…つまり、チョンテセは本人の意志と関係なく、サッカーの他のイシューにも名前を名乗る状況に立ち向かいつつある。

…チョンテセが今より、もっといい活躍を魅せ、'サッカー選手'というタイトルのみで、自分の夢を叶え、『獨島』を強いられない時が来るのを期待する。

サッカーを専門に扱う商業雑誌フオフォツー (FourFourTwo)、サッカーのみの専門誌ではないがスポーツメディアスポルタル코리아は、チョンテセ選手が国境の境界に存在する人物であるということ伝えていいる。ここまでは、一連の報道メディアのように、国家間対立か民族という共通項かという軸と変わらないように見える。ただ、報道メディアと異なるのは、サッカー専門誌、スポーツメディア共に国家や民族という単位を背景にしてチョンテセ選手を語るのみならず、あくまで本来は国家や民族という単位とは線引きされるはずの「サッカー」という単位を前面に出す。これは報道メディアのチョンテセ選手の取り上げ方とは異なるやり方である。報道メディアの国家と民族を主軸とした表象ではなく、サッカー本来の観点でみれば国家や民族とは乗り越える特殊性に置き換えられるという認識が姿を現す。以下を事例2の終わりとして、見てみよう。

「境界に立ったサッカー人達」

フオフォツー (FourFourTwo) 2008 年 4 月号

『ボールは丸い』という言葉は在日サッカー人達にはもう違う意味だ。彼が歩んだ足跡について行くと韓国、北朝鮮、そして日本が抱えている政治的な悩みがそのまま浮び上がる。彼らは丸いボールを蹴るためどちらかを選ばなければならなかった...サッカーは進化しているが、南北の‘平和’は相変わらず詰まったままだ。そしてその進化の端で‘ザイニチ’サッカー選手達がいる。この人々は南北が抱えている問題をそのまま縮小版で抱えて日本で生きている人々だ。いや、サッカー選手だ。

その自分がザイニチ出身でありながら朝日新聞スポーツ部で活躍しているキムハンイル記者は在日サッカーが大きく成長した理由を問う〈フオフォツー〉の質問に“やはりスポーツだから精神的な側面を無視できない。特にウリ学校(我が学校)で民族教育を受けて成長した子供達の場合はあえてある敵対的な感情ではないとしても何かを守って行き、成し遂げたいという意味が素晴らしい。チョンテセや安英學のような選手はその精神的な側面で身体能力、技術によく支えられて”事例と分析する。しかし同時に“この全ての状況がいつかは終るべき

だ”と言う。歴史が一人の個人に背負わせるようにした人生の重さは時には遙かにより重たいものであった。

…しかし在日の選手らもやはりプロであり、彼らは夢のためであれば国籍をもう障害物とは思わない。単純な書類の国籍ではなく心で祖国を選んだチョンテセ。韓国代表として選ばれるより日本代表として選ばれる可能性を選んだ李忠成。もしかしたら彼らに一番大切なのは“サッカーができる事”その自体かも知れない。混在された歴史が生んだサッカー場の‘ハルク’だったかも知れない彼らにもボールは丸くただサッカーは続くのみだ。在日選手達はそしてきょうも進化しつつある。

「サッカーが凍った心を溶かす」

フオフォツー (FourFourTwo) 2008 年 4 月号

…イングランドでは‘ダービーでは歴史は何の意味がない’という話がある。しかし、Korean Derby の場合、歴史が全てである。全世界を称じて Korean Derby より多くの意味を持つ、試合は多くない。朝鮮半島ではサッカーが長い間、両国の間で岩橋の役割をやって来た。4 月 1 日、ソウルで開かれる Korean Derby ではサッカーがどんな不可思議なことを起こすだろうか。色んな点で楽しみとなる 13 番目の Korean Derby である。

以上にみると新聞報道メディアとスポーツメディアの間に差異は存在するのだろうかという疑問を持つこともできる。言い換えれば、報道メディアに対してスポーツメディアは異なった観点でみていたのだろうか。事例では、チョンテセ選手の他者性が新聞メディアとスポーツメディアは共に大きく取り上げながらも、両者の間には相違と言える点があった。相違とは、新聞メディアがチョンテセ選手の選手像を描き出すと、北朝鮮の選手である他者性に照らしながら、彼を国家か民族かの対立項の集約点として表出するのに対し、スポーツやサッカーの専門誌ではチョンテセ選手が国境という境界のはざまに立つ人物であることを認めつつ、そうした境界は本来サッカーとは線引きされたものであると見ているという点だ。

スポーツメディアは、サッカー産業という資本の論理に内在した形で消費を促す。しかしここではあくまでゲームとしてのサッカーを堪能するのを期待する(決して珍しくはない)視点のもとで、これまでのメディア消費のあり方そのものが批評的に観察されている。それはスポーツメディアの進歩性を物言うよりは、そのように違うもの語りとして読みたいと、見せたいという望みが存在しているのを表していると言える。メディア消費そのもののあり方を問う視点を可能にしたのは、この視座そのものがサッカーファンを対象にし、サッカーを国家や民族より上のメタの理念としてみなす Beautiful game としての理想を主張しており、エンターテインメントとしてのサッカーに忠実なメディアの視座であったからであった。ただし、これはサッカーの歴史でみれば、ゲームとしてサッカーが

近代化して以来、国境や民族、葛藤などの様々な例を持っていて、それをゲームを楽しむ興行要素として積み重ねて来たからであるとも言える。国家や民族のもの語りとともに、サッカーの中で、ゲームを楽しむためのもの語りとして見せたい、読みたいという、韓国と北朝鮮の特殊な事情の観点ではなく、より上の普遍でメタな次元、サッカーというゲームの一般性で、最も激しいダービー[®]の試合として、南北の試合を語りたい、読みたい希望が韓国で存在しているのを示しているだろう。

結語

本稿では 2008 年、東アジアサッカー選手権大会や、2010 年ワールドカップアジア予選で韓国のメディアで映った韓国と北朝鮮の試合、北朝鮮のチームと選手の他者像を考えてみた。このなかで、日本の外国人登録証では韓国と表記されながら、北朝鮮代表として国際試合に出、かつ日本国内のサッカー・リーグ(J リーグの川崎フロンターレでプレーしている)で活躍する選手—具体的にはチョンテセ選手—を題材にした。複数の国境をまたぐ選手が、韓国のメディアそれぞれにおいて、いかなる扱いを受け、いかに消費されているのかに着目し、また報道メディアの視点とは異なるサッカー専門誌などの動向と比較して考察を行った。メディア言説の特徴で、国家や民族での志向により、特定のチームや選手がどのように語られているのかを調べたそれが韓国における民族と国家という帰属意識を露にすることに繋がる。

こうした、在日でありながら、北朝鮮の代表となった選手を巡る民族と国家意識の交錯は、北朝鮮を相手にした日本のメディア言説ではみることがなかったことでもあると言える。韓国より先に、2006 年のワールドカップのため、アジア最終予選で北朝鮮に会った日本では、未知、非公開、人口芝、第三国での試合、国家と国旗の問題などで国際大会に挑む北朝鮮チームの不器用、閉鎖性を語っていた。韓国も第三国での試合、国家と国旗の問題などで北朝鮮と葛藤があったがそれを上回る国家、民族、サッカーの大きな 3 カテゴリで北朝鮮のチーム、ある選手を語っていた。日本ではより単一化した他者としての北朝鮮のチームが存在して、在日の選手や応援団への眼差しで自己の中での他者を思い出しながら、北朝鮮を向かう日本の難しさや北朝鮮の不気味さを語っていた。

韓国、北朝鮮、日本など複数の国境を跨ぐ選手を語る際、韓国では国家、民族、サッカーというレファレンスでそれぞれ交錯するイメージと関わっていた。国際試合という場合は、必ず国家を背景にしてとり行われ、本論でみたように国家間の境界線上に存在する個人に大きな負荷をかける。特に、韓国—北朝鮮—日本という軸を舞台にした国際試合であれば、国境をまたぐ選手は思想の集約点になり、よりセンセーショナルな商品として付加価値を高めることになる。同時に、こうしたメディアの動向に距離を持とうとしながら、別の視座で見ようとする可能性もまた資本に忠実なメディアに存在する。

2005 年 7 月、韓国の代表的なサポーターグループ“赤い悪魔”は、自分のホームページで日本メディアに対する不満を表していた。それは、当時、サッカーの東アジア選手権大会を取材する日

本のメディアが、韓国のサポーターグループに、北朝鮮を応援するところを撮影させてもらうように依頼したことから始まる。韓国のサポーターグループは、韓国のチームが大会に参加している限り、彼らが応援するチームは韓国であり、北朝鮮ではないとの理由で北朝鮮チームの応援演出を断った。しかし、幾つかの日本の放送局らやメディアが執拗に、北朝鮮を応援する様子を 10 分でも見せるように要請したという^①。赤い悪魔は“韓民族の一員として大会の参加のため、韓国を訪問する北韓チームを真に歓迎します…しかし北朝鮮を応援する計画はないです…いくら南北戦にしても、グラウンドに南北選手 22 人がセンタサークルにボールを置いた時、選手らは“必ず勝利する”という志であるでしょう。”と述べている。朝鮮半島のデタントムードに日本のメディアが懸念を表すことも見受けられる。サッカーが南北のデタントに貢献し、あるいはそのために利用されているという日本のメディアは、赤い悪魔にその象徴的役割を要請したことになる。日本対韓国、メディア対サポーターの相反する立場の違いがあるなかで、日本のメディアにおける国家、民族、サッカーの3つのカテゴリの一致と韓国サポーターの3つのカテゴリの区別が存在しているのが分かる。韓国の社会でナショナリズムの理解として、民族主義を修辞学的に使い、民族主義を前面に出したが、実際には民族主義の勢力を圧殺してきた国家主義であるという見解が存在する。こうした理解は今後、東アジア地域のサッカー交流とナショナリズムの理解にとっていかにして進行するのも興味深い問題となる。

過去への新たな視座を提示する過程そのものは、メディアと資本が連携する上で成り立っており、市場の手にゆだねられている。そのため、歴史認識の改変過程自体は、市場化されているという意味では公共圏とはいえない。メディアの進歩性を力説するよりは、国家、民族の事項に比べ、違う観点で韓国と北朝鮮の対決を読みたい需要も韓国で存在して、それを読む側のメディアにとっては新たな歴史認識を提示していくのも可能になる。南北の試合を今までとは異なる物語として消費することも、歴史認識を改変してゆく場ともなりえるし、東アジアという舞台においては過去への新たな視線を創造するという意味で、公共的な機能を偶発的にも果たす局面を潜在させているといえる。

^①本稿はサッカーの国際試合を舞台に、国家と民族をめぐる問題がいかにしてメディアで表出されるかについて考察したものである。こうした本稿の着眼点は、日本の批評理論や社会学ではあまり扱われていないテーマである。類書としては、黄順姫編. 2003. 『W杯サッカーの熱狂と遺産—2002年日韓ワールドカップサッカーを巡って』. 世界思想社. や有元健、小笠原博毅編. 2005. 『サッカーの詩学と政治学』人文書院. があげられる。

^② 安部[2008:183f]

^③ 「北朝鮮—国歌掲揚、国歌演奏 NO」, 『サンケイスポーツ電子版』 2005年1月15日。

^④ 人工芝は FIFA の Goal Project の一環として設けられたものである。Goal Project は 1999 年 FIFA によって、様々な国のサッカー環境を‘組織、トレーニング、青少年、インフラ、各国の事情で必要な分野面’での改善を目指して支援するプログラムである。2001年10月29日北朝鮮は Goal Project を受け始め、改築して、2002年10月25日、人工芝を磨き直した平壤の金一成競技場の開始式に AFC (アジアサッカー連盟) 総裁が出席したという。FIFA の審査を通過し、最高レベルの国際試合を行うのに問題はないと認められ、改築した人工芝は北朝鮮では新しい発展をもたらすと期待されていたという。Goal Project は 2005 年の時点で、2 期目に入り、アゼルバイジャン、ベラルーシ、エストニア、キルギス

タン、ラトビア、リトアニア、モルドバ、ロシア、トルクメニスタンなどの旧ソ連の15国が Goal Project の支援で人工芝を設けることになった FIFA ホームページ (<http://www.fifa.com/>) 内、Developing the game の項、Goal Programme <http://www.fifa.com/en/development/goal/index.html> を参照。

⑤ 玄 [2005: 16f]

⑥ 玄 [2005: 12f]

⑦ このプレシアン・スポーツの記事は誤報がある。つまり、チョンテセ選手は韓国籍でありながら、北朝鮮代表チームでプレーしているのではない。彼は父が韓国籍ではあるが、日本の外国人登録証が韓国籍ではなく朝鮮籍であり、彼の国籍は報じられていない。国籍は報じられていないが、海外旅行の度にパスポートを申請しなければならない立場である。

⑧ 我が学校と言う意味での韓国の独立映画。2006年釜山国際映画祭で公開した。監督金明俊。日本の北海道にある民族学校 '北海道朝鮮小中高級学校' の日常を描いたドキュメンタリー映画。

⑨ ゴ 2005[23-33f]

⑩ Derby match と呼ばれるライバルとの激しい争い—同じ都市を根拠地とするライバル・チームの試合

⑪ 韓国 サポーターグループ赤い悪魔(붉은 악마)公式ホームページ(<http://www.reddevil.or.kr>)内の、“赤い悪魔は大韓民国サッカー代表チームを応援します”と題された Red Devil Supporter Column (2005年7月31日)より。

参考文献

阿部 潔 2001 『彷徨えるナショナリズム—オリタリズム、ジャパン、グローバリゼーション』世界思想社。

——— 2008 『スポーツの魅惑とメディアの誘惑』世界思想史。

有元健、小笠原博毅編。2005. 『サッカーの詩学と政治学』。人文書院。

고명섭 2005 『지식의 발견(한국 지식인의 문제적 담론 읽기)』=ゴミョンソブ 2005 『知識の発見(韓国知識人の問題的談論読み)』グリーンビ(ソウル)

玄武岩 2005 『韓国のデジタル・デモクラシー』集英新書。

黄順姫編。2003. 『W杯サッカーの熱狂と遺産—2002年ワールドカップサッカーを巡って』。世界思想社。

Andrews, D. L. 2001 “Sport” Maxwell, R. (ed.) *Culture works: the political economy of culture*: 131-162, Minneapolis: University of Minnesota Press.

Armstrong, G. & Giulianotti, R. (eds.) 1997 *Entering the field: new perspectives on football world*, Oxford: Berg.

Boyle, R. & Haynes, R. 2000 *Power play sport, the media and popular culture*, Harlow: Longman.

——— 2005 *Football the new media age*, London: Routledge.

Brown, A. (ed.) 1998 *Fanatics! Power, identity & fandom in football*: 124-138. London: Routledge.

-
- Conn, D. 2004 *The beautiful game?: searching for the soul of football*, London: Yellow Jersey Press.
- Dunning, E. & Malcolm, D. (eds.) 2003 *The development of sport (Sport: critical concepts in sociology □)*, London: Routledge
- Finn, G. P. T. and Giulianotti, R. (eds.) 2000 *Football culture: local contests, global visions*, New York: Frank Cass.
- Foer, F. 2004 *How soccer explains the world-An unlikely theory of globalization*, New York: Harper Collins Publishers.
- Gillespie, S & Toynbee J. 2006. *Analysing Media Texts* Open University Press
- Giulianotti, R. 1999 *Football: a sociology of the global game*, London: Polity Press.
- Hall, S. 1997 *Representation cultural and signifying practices*, Open University.
- Manzereiter, W. & Horne, J. (ed.) *Football goes East: Business, culture and the people's game in China, Japan and South Korea*: London: Routledge.
- Kuper, S. 1994 *Football against the enemy*, London: Orion.
- [n.d.] *On the World Cup =2003* 土屋晃・近藤隆文訳 『ナノ・フットボールの時代』, 東京: 文藝春秋。
- Rowe, D. 2004 *Sport, culture and the media: The unruly Trinity*. 2nd edition, Berkshire: Open University Press.
- Woodward, K. (ed.) 1997 *Identity and difference*, London: Sage.
- 2000 *Questioning identity: gender, class, nation*, Routledge in association with the Open University.

2008 年度次世代研究「東アジア地域におけるサッカー交流の探求 — ナショナリズム、人種主義、グローバリズムの観点から —」（研究代表：金賢善）による成果である。

【メンバー】

キム ヒョンソン

金賢善 （京都大学高等教育研究開発推進機構 非常勤講師）